

## フィリピン地方政治研究における 国家中心のアプローチの展開

John T. Sidel, *Capital, Coercion, and Crime: Bossism in the Philippines*. Stanford: Stanford University Press, 1999, xii+225pp./ Patricio N. Abinales, *Making Mindanao: Cotabato and Davao in the Formation of the Philippine Nation-State*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2000, xii+235pp.

かわ なか たけし  
川 中 豪

はじめに

- I フィリピンにおける地方政治研究の系譜——文化と社会——
  - II ポシズムと相互応化——国家と制度——
  - III フィリピン国家をどう理解するか——ポシズムと相互応化からの解答——
- むすびにかえて

はじめに

フィリピン政治研究のなかでも比較的多くの成果を生みだしてきた地方政治研究において、このところ新しい動きが見られる。

フェルディナンド・マルコス (Ferdinand E. Marcos) 政権下で一時停止されたとはいえ、フィリピンでは、20世紀初頭のアメリカ統治期から下院選挙や地方選挙が実施されており、地方レベルでの政治が長らく活発であった。そのため、フィリピン政治研究において地方政治に対する関心は特に高いものであったと言ってよい。加えて、実証的なデータ収集が比較的容易であり、その研究方法としての有効性もこうした関心を維持することに役立ってきた。

そうした中で、これまでこの分野では、政治学者のみならず、人類学者、社会学者、歴史家などによって研究が積み重ねられてきた。しかし、異なる学問領域の専門家が参加しながらも、そのほとんどが伝統社会の文化・価値や、家族、親族といった社会組織、さらには社会経済構造などによって地方政治

を説明する傾向が強かった。つまり、文化的アプローチと社会構造論的アプローチが中心的な位置を占めてきたのである。こうした理解の仕方に対し、近年、アメリカ政治学における国家論、制度論の隆盛を反映しながら、国家や制度の果たす役割に注目する国家中心の構造的アプローチをとる研究が登場しつつある。表記の2つの著作はその代表と言ってよい。

本稿では、これまでのフィリピン地方政治研究に対して大きな視点の転換をせまるこの2つの研究を取り上げることで、フィリピン地方政治研究の流れを明確にするとともに、こうした新しいアプローチが地方政治研究、さらにはフィリピン政治研究全体にどういった意義を持つのかを明らかにしたい。

議論を始めるにあたって、まずは、これまで主流であった文化的アプローチと社会構造論的アプローチの整理から取りかかる。

### I フィリピンにおける地方政治研究の系譜 ——文化と社会——

#### 1. クライエンタリズム

フィリピンに限らず、発展途上国の政治研究は、一般的にこれまで文化的アプローチ、あるいは社会構造論的アプローチをとり、文化や社会構造などから政治を説明する傾向が強かった。

文化的アプローチは、その国、地域の伝統的社会が持つ文化・価値を独立変数とし、それが政治を規

定すると考える。一方、社会構造論的アプローチは、社会の持つ構造、例えば地方政治という領域に限って考えれば、特定地域における社会経済的構造、つまり、地主小作関係の存在や、あるいは伝統的社会的中心に位置する家族・親族関係などによって政治動態が規定されるものと理解している。文化的アプローチと社会構造論的アプローチは、前者が意識、後者が構造という異なる独立変数を想定するためその説明の仕方は異なる。しかし、実際の研究においては、相互に補完するものとして親和性が高いと考えられ、「社会構造とそこに存在する絆としての文化」としてペアになって利用されてきた。

フィリピン政治研究も同様の傾向を持った。例えば、フィリピン政治研究の初期の代表的な研究者であるジーン・グロスホルツ (Jean Grossholtz) は、政治文化論の枠組みを念頭に、「フィリピンにおける政治発展の成功は、2つの相互に関係する要因によるものである。それは歴史的経験と文化的パターンである」[Grossholtz 1964, 5] とし、特に「互酬性」という伝統的な社会・文化的枠組みの重要性を強調している<sup>(注1)</sup>。地方政治研究の分野で、こうしたアプローチをとった先駆けは、社会学・人類学の訓練を受けた研究者によるもので、ピコール地方の農村での調査を通じて「ビッグ・ピープル」と「リトル・ピープル」の2つの階層構造を指摘したフランク・リンチ (Frank Lynch) の研究 [Lynch 1959] や、ブラカン州の農村をフィールドとして、こうした2つの階層間に存在する伝統文化に根ざした互酬関係、例えば、儀礼親族関係 (compadrazgo) やウータン・ナ・ロオブ (utang na loob, 直訳すれば「内的債務」、意識として「感謝の意」と理解される) などに着目したメアリー・ホルンスタイナー (Mary R. Hollnsteiner) の研究 [Hollnsteiner 1963; 1973] がその代表的存在である。

パトロン・クライアント関係を軸とするクライアタリアリズムの議論はこのような文化と社会構造中心の理解を精緻化しようとした議論である。パトロン・クライアント関係は、異なる地位の2者間に発生する「全人格的」な友愛的互酬関係であり、伝統的な社会の価値を反映したものと理解される<sup>(注2)</sup>。

その意味でこれは文化的なアプローチであるが、その一方で、地主小作関係という社会経済構造を前提としているため、社会構造論的アプローチの側面も併せ持つ。

カール・ランデ (Carl H. Landé) は、このクライアタリアリズムの議論をフィリピン地方政治研究の最も有力な枠組みとして確立させた研究者である。ランデは、まず、パトロン・クライアント関係の垂直的連鎖がフィリピン政治の構造を作りあげていると捉える。調査当時の国民党 (Nacionalista Party) と自由党 (Liberal Party) の2大政党の存在について、これらの政党がそれぞれの州 (province) の裕福な政治家から町 (municipality) レベルの政治家、バランガイ (barangay) レベルのリーダー、そして農民へと続く垂直的な2者間のパトロン・クライアント関係の連鎖によって構築されていると見ている [Landé 1965, 2]。もう一方で、地方における政治単位として派閥の存在を指摘し、これによってフィリピンの地方政治は理解できると考える。ランデのいう派閥とは、裕福な家族集団を中心とし、その周りに相対的にそれほど裕福でない家族集団が位置するという家族集団の連合体として理解される。そしてこの連合体において中心的家族集団と周辺の家族集団を結びつける絆として、姻戚関係、儀礼親族関係、パトロン・クライアント関係などの存在が指摘される<sup>(注3)</sup>。

さらにランデは、土地所有を中心とした個人の私的資産が地方政治において重要な役割を果たすと認識している。国家からの利益供与を必要としない大土地所有者が、個人的私的資産を基礎に特定の領域での権力を維持し、その権益を脅かそうとする国家の試みに対しても抵抗することができると主張している [Landé 1965, 4-5]。

パトロン・クライアント関係、(家族・親族関係をベースとした) 地方派閥、大土地所有といった要素を用いて地方政治を説明しようとしたランデの議論は、文化的、社会構造的な地方政治理解の代表格と言ってよい。しかし、その後、このクライアタリアリズムの議論は近代化論的修正を受ける。実際の地方における政治的關係が「広範にわたる『全人格

的』な関係」[Scott 1972, 95]と理解される関係ではなく、より政治に特化した短期的な関係になっていること、そして、土地所有やそのほかのタイプの私的資産に依存しない、専門政治家の存在が観察されること、の2点が問題とされたのである。

クライエントリズムの近代化論の柱は、社会経済的構造の変化によってパトロン・クライアント関係が変質していくというものである。それは具体的には政党における忠誠の発展の過程として議論される。原型として伝統的な服従のパターン（垂直的なつながりで、パトロン・クライアント関係と解される）の存在を想定した上で（第1段階）、急速な社会経済的変化にともなってこの伝統的な服従のパターンが弱められ、また、リーダー間の競争の激化が発生して、具体的、短期的、物質的な誘因によって政治協力が引き出されるようになる（第2段階）、さらに経済成長の過程で、水平的（機能的）な階級あるいは職業による結びつきが形成され、政治支持の誘因としては政策やイデオロギーの主張が中心となる（第3段階）、というのがその議論である[Scott 1969]。こうした近代化論をフィリピンの地方政治に適用した代表例がキット・マチャド（Kit G. Machado）の研究であった。マチャドは、土地の集中度が低く、社会動員の高いという社会経済的構造の認められる地域においては、大土地所有者ではなく、より低位の社会階層出身者が地方政治家として出現していることを指摘し、そうした政治家をニューマンと呼んだ。さらに、地方政治の単位として、ランデの想定する派閥ではなく、政治に特化した集票組織としての政治マシンが登場しているとした[Machado 1974, 同様のものにBenson 1973]。そして、こうした社会経済的構造の変容とクライエントリズムの近代化という議論は、その後の特に都市部のクライエントリズム研究として展開されていた[Nowak and Snyder 1970; Leichter 1975; Magno 1993]。

しかし、近代化論的修正が、社会経済構造の変化に基づいている限り、ランデのアプローチを修正しながらも基本的にはそれを踏襲したものであることは言うまでもない。その意味で、マチャドの修正を

受け、文化的、社会構造的アプローチは依然として支配的な枠組みとしてその地位を維持したと言えるだろう。

## 2. 「ウォーロード」の地方政治

1972年に開始されたフェルディナンド・マルコスの戒厳令体制は、地方、議会双方の選挙の停止とともに地方政治の場を閉鎖し、中央政府による地方への介入を大幅に高めたことで、地方政治そのものの動きを封じ込める効果を持った。そのため、地方政治研究も大きく停滞することになる。

地方政治への関心が再び高まりを見せたのは、1986年のマルコス政権の崩壊後、つまり、コラソン・アキノ（Corazon C. Aquino）大統領のもとの「民主化」過程においてであった。それはとりもなおさず、選挙の再開とそれにとまなう地方政治の再活性化に帰因するところが大きい。しかし、権威主義体制の成立と崩壊、民主体制への移行と、マクロの政治体制の変動を経たものの、1986年以降の地方政治研究は、むしろ「変化」より「継続」に大きな関心が払われた<sup>(注4)</sup>。それは政治体制が変動したにもかかわらず、地方権力者たちの顔ぶれがあまり変わらなかったことによる。特にメディアを通じて「ウォーロード」(warlord)、「トラボ」(trapo, traditional politicianの略だが、タガログ語では「ほろきれ」を意味する)、「カシケ」(cacique)、「ボス」(boss)といった言葉がこうした地方権力者たちに与えられ、さながらフィリピンは、地方権力が独自に割拠する無政府状況にあるという印象で捉えられる論説が増加した[McBeth 1989]。

「ウォーロード」と表現された地方権力に関しては、大まかに言って現象面での2つの特徴が目された。ひとつは、家族、近親によって特定地域の公職を独占する傾向が強いこと、つまり、特定地域において州知事、町長、市長などといった職がひとつの家族、親族集団で固められ、さらには、世代を越えて権力の継承が行われることである。そして、もうひとつは、私兵団の保持など、地方権力の暴力的な面である。フィリピン調査報道センター(Philippine Center for Investigative Journalism)やポピュラー・デモクラシー研究所(Institute for

Popular Democracy) など、ジャーナリストたちはこうした特徴を努めて描きだした [Gutierrez et al. 1992; Gutierrez 1994; Lacaba 1995]。

こうしたジャーナリズムによる事実の提示に呼応して、「ウォーロード」的の地方権力者像を、国家と家族の関係をふまえて理解し直そうとしたのがアルフレッド・マッコイ (Alfredo W. McCoy) の研究である<sup>(註5)</sup>。マッコイは、フィリピンの政治は、「弱い国家」と「強いエリート家族」によって特徴づけられるとする。その上で、仮説として以下の4つのポイントを指摘している。すなわち、(1)家族を基盤とする寡頭支配体制は、(特に国家との関係で顕著に) フィリピンの歴史において重要な意義を持ち、(2)エリート「家族」間の関係が、フィリピン政治の推移に大きな影響を与え、(3)双系制親族関係の複雑なパターンに基づいて組織されるエリート家族は、派閥を政治の領域に持ち込み、(4)そして、レントシークを行う強力な家族と、それに対応する弱いフィリピン国家との関係は、相互依存的なものだというものである [McCoy 1994, 19]。

マッコイの議論は、ジャーナリズムが提起する問題を学術的に整理しようと試みたものであるが、依然として家族、特に双系制親族関係を重要視し、ランダの主張する派閥の存在の指摘を繰り返している点については、従来の文化や社会を中心とした枠組みを大きく越えるものとはなっていない。ただ、後述の「家産的略奪者」の議論に影響を受けて、レント・シーキングを軸に国家との関係に着目したことは [McCoy 1994, 21]、新しい理解を提示したものとと言える。この国家との関係がその後の地方政治研究にとって重要な意味を持つ。

## II ポシズムと相互応化——国家と制度——

### 1. 国家の登場

文化と社会を地方政治理解の中心に据えてきたこれまでのフィリピン地方政治研究の系譜は、ジョエル・ミグダル (Joel S. Migdal) の「強い社会、弱い国家」論と共通性を持つ [Migdal 1988]。「強い社会、弱い国家」論は、いわゆる第三世界において、

自らによる単一の社会統制を実現したいと考える国家指導者と、特定の地域において独自に社会統制を掌握する社会の「強者」(strong men) の間にその優位性を競う関係が存在することを前提とする。そして、国家指導者と社会強者の間のこうした競争関係において、いまだに社会強者の優位性が高く、社会統制は統合されないままバラバラに存在していると主張する。地方権力を社会の文化・価値や関係性・構造に基盤を置く存在として理解するクライエントリズムや「ウォーロード」の地方支配といった議論は、概ねこのミグダルの議論に沿っている。

しかし、ミグダルの議論でどうしても拾いきれないのが、国家の果たす役割である。地方権力をつぶさに観察すると、その権力獲得・維持過程には国家装置、国家資源、制度といったものが密接に関わっていることが窺える。より具体的にいえば、国家の財政、信用供与、規制権限、暴力装置 (警察・軍)、といった資源の果たす役割、そして選挙制度や政治家と官僚との関係を規律する制度の重要性である。ポール・ハッチクロフト (Paul Hutchcroft) は、「家産的略奪者」(patrimonial plunder) としてフィリピンの権力者像を提示したが、そこでハッチクロフトは、「国家装置へのアクセスが私的蓄積の主要な道筋でありつづけてきたのであり、『レント・シーキング』の機会の存在が、特別な配慮を受けてきたエリート、あるいはそうした配慮を受けたいと考えるエリートたちが大統領府へ殺到する状況を生み出し続けている」と指摘して、国家機構、国家資源の重要性をあらためて提起した [Hutchcroft 1991, 414-415]<sup>(註6)</sup>。また、一方で、1980年代半ば以降、アメリカ政治学において国家論、新制度論が隆盛しており、そうした研究動向によって国家への注目が促進され、さらに国家中心的理解の理論的な基盤を提供することになった。こうした動きは、また、政治を説明する要因として、社会から国家へという転換だけではなく、文化から構造 (制度) への転換を一層進めた<sup>(註7)</sup>。

このような研究動向のなかで、フィリピン地方政治研究においても、文化と社会構造を中心とした理解から、国家を中心とした構造的な理解への転換がは

かられている。その代表例が、表題のジョン・サイデル (John T. Sidel) とパトリシオ・アビナレス (Patricio N. Abinales) の研究である (以下、Sidel 1999, Abinales 2000 と表記)。双方ともコーネル大学に提出した博士論文に基づいた出版である。以下、サイデル、アビナレスの順にその議論を紹介したい。

## 2. ボシズム：強制力と経済力の独占

サイデルは「ボシズム」(bossism) という用語を使い、「ウォーロード」的理解と国家中心的な構造的な理解を融合させた。サイデルは一連の「ウォーロード」的議論の立て役者の一人でもあり、むしろ、1986年以降のフィリピンにおける地方政治研究の進展は、サイデル自身の研究の展開と符号していると言った方が正確であろう<sup>(注8)</sup>。

サイデルの議論はこれまでの地方政治研究の枠組みへの批判から始まる。その際、フィリピンの地方権力を理解する上で、スペイン統治期からの社会・文化的な遺産やクライエントリズムといったものが重要なのではなく、独立後のフィリピン国家によっても継承されたアメリカ統治支配の制度的構造、そして、また、経済的蓄積、政治的競争、社会関係における暴力と強制の役割が重要であるという基本的な立場を明確にする [Sidel 1999, 6]。サイデルはフィリピン政治研究のこれまでの系譜を、(1)パトロン・クライアント関係と、それを修正した近代化論的クライエントリズム [Landé 1965; Machado 1974] と、(2)ネオ・マルクス主義的「階級論」と(土地所有など私的資産を基盤とした)社会の寡頭勢力による国家支配の議論 [Hawes 1987; Rivera 1991; Simbulan 1965] に整理した。そして、(1)に対しては、互酬関係を否定する強制の存在、特に暴力が地方において行使されること、そして近代化論的クライエントリズムの指摘する「ニューマン」も、地方権力が長期にわたって特定の地域において支配を継続することによって、議論の根底が揺るがされているとした。また、クライエントリズムが依拠するパターナリズム的社会がかつて存在したという前提も、歴史的な検証においては幻想にすぎないとしている。(2)に対しては、国家から独立した権力

基盤の存在を疑問視して、土地の集積、その他の資産の蓄積も国家を利用したものであるとし、国家の役割軽視を批判した。これはそのままミグダルの「強い社会、弱い国家」論への批判ともなっている。

文化・社会中心的理解に替わって、サイデルが目指するのは2点である。ひとつは、アメリカ統治下に導入され、その後現在に至るまで継続する国家の制度的構造である。それは強制力や経済権益などの私的独占を可能とするような国家装置の選挙戦への従属を規定するものであると捉えられている。さらに、もうひとつは、「本源的蓄積」(primitive accumulation) という資本主義の発展段階である。住民の多くが生産手段への直接的統制や生活の糧への直接的アクセスを失い、経済的な不安定やわずかな賃労働に依存するというこの資本の「本源的蓄積」段階において、サイデルは、経済的資源や特権が公的な領域、つまり国家に独占され、財産権の保証が国家によって確立されない状態が継続すると考える。そして、この国家の制度的構造と資本の本源的蓄積という2つの条件のもとで、特定の領域において強制と経済的資源を独占的に支配する略奪的な権力ブローカーが出現し、それが「ボス」と称されるものであるとする [Sidel 1999, 16-19]。

ボシズムの議論を展開するうえで、サイデルが事例として選んだのは、カビテ州とセブ州である。双方とも都市化の急速に進む地域であるという共通点はあるが、その権力者の特徴には相違もあり、ここにはボスの多様性をも研究課題に包摂しようとする意図が見られる。

カビテ州の権力は2層の構成を持つと考えられており、町レベルのボスと州レベルのボスが描かれている。カビテのボスの特徴として、違法経済活動(密輸、違法賭博)に依存する暴力的な強面のマフィア、ギャング的性格が強調されるとともに、「王朝」のような権力の継承がおこらず、1世代ごとに権力者が交代するパターンが指摘される。また、ボスは上位パトロンとの関係、つまり、町レベルのボスにとっては州レベルのボス、州レベルのボスにとっては、国政レベルのパトロンとの関係が重要であることも強調される。サイデルは、こうしたカビテ

のボスの特徴が、権力の維持を国家から派生する利益、権限（警察、違法経済活動や土地利用に関わる規制）に大きく依存することから生み出されていると説明する。上位パトロンとの関係によって国家資源の利用の道が開かれる、あるいは閉ざされるということが決定され、それが国家資源への極度の依存という性質上、直接的にボスの権力の拡大と消滅につながっており、そのため、結果として権力の継承が発生しにくいと見るのである。

一方、セブ州においては、権力は3層、すなわち、町、下院選挙区、州によって構成されていると分析している。特徴としては、特定家族の政治的継続性が長い「王物的」傾向が見られるとし、また、権力基盤に関しても、カピテほど国家に直接的に依存しているわけではなく、暴力と違法経済活動への関わりが比較的少ないとされる。そうした特徴が生まれる理由として、セブのボスたちには、土地所有やビジネスなどの国家外の私的資本蓄積が多く（とはいえ、国家の資源を利用して蓄積されたものには変わりないとするが）、国家へのアクセスがカピテほど直接的な影響を持たないということがあげられている。州レベルのボスとして描かれるオスメーニャ (Osmeña) 一族はその代表的な例で、暴力でも経済の独占的支配でもなく、土地の経済エリートとの協力関係と都市型の政治マシンに大きく依存している様子が描かれている。

### 3. 相互応化：「強い社会、弱い国家」論の修正

サイデルの極めて国家中心的な理解の仕方に対して、もう一方のアビナレスは、国家の役割に注目する構造的なアプローチをとりつつも、サイデルとは異なり、国家と社会の関係性に焦点を当てる。

アビナレスの関心はフィリピンにおいて少数派であるムスリムが居住する地域と、また、国内移民の終点として開発のフロンティアでもあった地域の2つを含むミンダナオ島南部である。彼は、この地域の政治を説明するに際して、これまで提起されてきた2つの枠組み、つまり、アイデンティティ政治論（エスニシティ論と言い換えられよう）と経済還元主義的な議論に異を唱える。アイデンティティ政治は、宗教あるいは共同体としてのアイデンティティ

が政治を説明する独立変数として取り扱われるもので、ミンダナオの政治をムスリムのアイデンティティ、あるいはその対向者であるキリスト教徒のアイデンティティとの関係で理解しようというものである。一方、経済還元主義的な理解とは、経済構造が政治を規定すると考えるもので、特にミンダナオ南部の問題としては、多国籍資本の進出や商業化など経済変化が階級対立を拡大させたとする説明をする。アビナレスは、アイデンティティや経済変化は独立変数ではなく、むしろ国家建設とその変容のパターンによって引き起こされたものであるとし、国家の役割に注目した。

アビナレスは、基本的にはサイデルの批判する「強い社会、弱い国家」論を議論の基礎に置く。しかし、ミグダル流の議論をそのまま使用するには問題があると考え、それを修正することによって適用可能性を高めようとしている。アビナレスが問題とするのは、国家と社会の厳密なあるいは形式的な区分である。実際の状況を見れば、ミグダルの議論のように国家と社会（あるいは公と私）の区分が明確になることはなく、むしろ、国家と社会強者の間には相互依存の関係が見られるとし、それゆえ、政治を説明するためには、国家と社会の境界の曖昧さを分析に入れ込む必要があるとする。ここで、アビナレスは国家と社会の間で相互に行われる応化 (accommodation) の概念を取り込もうと考える。国家は統治のために社会に適応しようとし、社会、特に社会強者はその権力の維持のため、国家に適応しようとする、というのがその基本的な考えであり、その過程を相互応化という言葉によって表わした。社会の強者＝地方権力は、その際、国家の代表としての公的役割と社会の代表としての私的役割の双方を担うものとして理解されている [Abinales 2000, 13]。

ここで、社会強者がその権力を国家へのアクセスによって保つという行動をとるのは、制度、とくに選挙制度の存在によって引き起こされていると考えている。アメリカによって持ち込まれた選挙制度が、国家レベルの政治への参加と資源獲得の制度的枠組みとして発生し、社会の強者はその「ゲームの新しい

ルール」を利用して権力支配を指向するという理解である。これは、制度によって政治アクターがその行動を規定されるという、極めて制度論的な理解である。「強い社会、弱い国家」を前提としながら、国家装置、国家資源の役割を取り込む工夫を、「応化」という概念を導入することで解決しようとし、その際、制度の果たす役割を強調するのである。

アビナレスが事例として取り上げているのはミンダナオのなかでも特にコタバトとダバオである。コタバトはムスリムが多く居住する地域であり、一方のダバオはルソン島やビサヤ諸島からのキリスト教徒移民によって開拓された地域である。それぞれミンダナオ島の持つ2つの特徴、つまり、少数者の存在とフロンティアとしての歴史を代表的に示す地域である。

アビナレスは、まず、ミンダナオ統治の歴史を、アメリカが軍政によって統治した時期とその後のフィリピン化（植民地期におけるフィリピン人による統治への転換）までの過程から振り返る。ここで、参政権、政党、任命官職といった新しい制度の導入、そしてその制度によって国家と社会の関係が構築されたことが示される。次に、コタバトとダバオの政治の変化が示される。コタバトでは、それまでのあくまで個人的「力」に依存する勇者（men of prowess/orang besar）[Wolters 1999, 112-113]の支配にかわって、マニラの政治家との関係によって権力を保持する強者の登場が示される。一方、ダバオでは、アメリカの植民計画失敗の後、日本資本の農園経営成功のカギが、これもマニラの植民地支配下のフィリピン人政治家との関係への依存であることが示される。この2つのケースによって、それ以後の国家との関係に依存する地方権力の原型が提示される。

植民地期の地方権力が描かれた後で、続いて独立以後の政治について議論が展開される。そこでは、ミンダナオの社会経済的状況変化と国家と社会の関係について外観し、1960年代までは政治的に安定していたことを示した上で、コタバトの代表的政治家サリパダ・ペンダトゥン（Salipada Pendatun）とダバオの代表的政治家アレハンドロ・アルメン

ラス（Alejandro Almendras）が取り上げられている。この2人の政治家の事例を通じて、相互応化がミンダナオにおいて社会強者の権力支配をいかに説明できるかを示そうとするわけである。ペンダトゥンが国政レベルの政治に重きを置いたのに対し、アルメンダラスが地方からのボトム・アップによって国政にたどりついたという相違はあるものの、双方とも国家と社会のバランスをとることで権力を支配した様子が描かれている。

最後に国家の介入の増大したマルコス期に触れ、従来の相互応化のバランスの崩壊と、それによって暴力、強制といったものが高まり、その後のミンダナオの反政府運動（ムスリム分離運動と共産主義運動）の展開に至ったことが示唆されている。

### III フィリピン国家をどう理解するか — ボシズムと相互応化からの解答 —

#### 1. フィリピン国家理解の手がかり

サイデル、アビナレス双方とも、膨大な資料を駆使しており、実証研究としての質は非常に高い。それゆえ、カビテ、セブ、コタバト、ダバオの地方政治史研究としても極めて重要な研究となっている。しかし、それと同様に、あるいはそれにもまして評価されるべきは理論的貢献であろう。地方政治分析に国家の視点を持ち込んだことは、フィリピン地方政治研究の画期的な転換を示したものとして注目される。

ただ、ここで乗り越えなければならない問題がある。フィリピン国家は、官僚機構の集権性、官僚の数や質などの国家の「属性」という観点からは、もっぱら「弱い」と認識されているのは間違いないだろう。日本、韓国、台湾などを持ち出すまでもなく、近隣のシンガポール、マレーシア、あるいはインドネシアなどと比べてもそうした傾向は明らかであり、さらに、国家主導の政策遂行がなかなか成功しないことがその議論を後押ししている。そうした認識の中、フィリピンにおいても実は国家が重要な意味を持つという斬新な主張をするためには、分析にあたって国家を捉えるための概念的な工夫が必要である。

政治を説明するカギとしての国家の重要性和、国家の「属性」の「弱さ」との溝をどう理解すべきか。

サイデルは、ピーター・エバンズ (Peter B. Evans) の議論を基礎にし [Evans 1989]<sup>(注9)</sup>、国家のタイプを「開発国家」と「略奪国家」に区別して、フィリピン国家は「開発国家」としては弱いとしても、「略奪国家」としては強いとの議論を立てることでこの問題を解決しようとしている<sup>(注10)</sup>。ここで「略奪国家」の能力とは、「獲物の幸福を捕食者が顧みないのと同様に、国家機構を支配する者が市民の幸福を考えないで利益を奪い取る」[Evans 1989, 562] 能力と規定される [Sidel 1999, 146]。サイデルは、こうした「略奪国家」の概念を設定することで、もっぱら官僚や開発を尺度として「強弱」を議論することから自由になり、定義によっては、フィリピン国家も「強い」と言うことができるのである<sup>(注11)</sup>。そして、ミグダルの言葉を逆手にとりながら、フィリピンの「国家指導者 (state leaders) には、国家の機関を利用して社会の人々に自ら意図することをさせる能力」[Migdal 1988, xiii] があり、その意味でフィリピン国家は「社会に浸透し、社会関係を規制し、資源を抽出し、資源を決然として着服もしくは利用する」[Migdal 1988, 4] 能力があり、また「あらゆる組織化された社会の利益」[Evans 1989, 562] から課せられる国家指導者に対する制限は弱いと主張する [Sidel 1999, 145-146]。サイデルにとって「フィリピン国家とは、単にパトロン・クライアント関係の資源でもなく、また、寡頭略奪者の対象でもない。それは列島中の人的・天然・資金的資源の私的搾取と蓄積のための略奪メカニズムの複合体なのである」[Sidel 1999, 146]。それは、フィリピン国家が「属性」という点で弱いとしても、国家が社会 (特定階級や市民社会) によってコントロールされることはないのであり、国家は取奪機構としては「強い」のだ、という議論である。

一方、アビナレスは、国家の能力に対する理解を修正することで対応しようとしている。それは、国家による高度の統治能力を想定するウェーバー流の国家の理念型に執着することは国家を理解するうえ

で限界があるとする立場である。彼は、「ミンダナオ南部の議論を通じて理解されるのは、国家の能力が、国家が市民社会の上位に上昇し、ヘゲモニーを課する能力に基礎を置くのではないということである。その影響力は政治を行うことのパラメーターを規定することにある」[Abinales 2000, 182] とし、「社会勢力と妥協する能力」[Abinales 2000, 183] に注目すべきだとする。アビナレスによる国家の能力の定義は、その意味で、「フィリピンのように構造的に弱い国家においては、国家の能力は国家と社会の交換によって規定されるのであり、それは、地域、地方の強者の仲介による」[Abinales 2000, 183]。つまり、アビナレスは、フィリピンの国家は基本的に「弱い」という前提に立った上で、しかし、応化という過程によって、国家は社会の強者を仲介者として権力を規定する役割を担い、その点では能力があるのだ、としているのである。

「略奪国家」と「開発国家」の区別 (サイデル)、社会勢力と妥協する能力 (アビナレス)、といった両者の議論は、いずれも「属性」を中心とした国家の「強弱」という尺度の立て方の問題性を乗り越えるのに有効な議論を呈示していると言ってよいだろう。

## 2. 国家論の系譜とフィリピン国家

国家の役割に注目し、制度に関心を寄せるサイデルとアビナレスであるが、その国家の理解の仕方には相違がある。国家の能力への評価と社会の位置づけといっても良い。サイデルは、国家の役割を前面に出すとともに、国家に太刀打ちすることのできない社会の「弱さ」を主張している。一方、アビナレスは、国家の役割を強調しながらも、しかし、社会の持つ対抗する力を否定しない。国家と社会の並存を基本的な立場とし、両者の相互依存を認め、そのなかでの国家の果たす役割に注目しようとしている。

サイデルとアビナレスの相違を考えると、その原因のひとつは、その論証のもととなる事例の相違にあると考えることができる。スペインによる支配を受け、さらにアメリカ植民地以降もフィリピン国家と大きく関わってきたマニラ近郊のカピテヤ、ピサヤ地方の中心地でフィリピン第2の都市セブなど



の地域をサイデルが取り上げたのに対し、アビナレスは、スペイン期には植民地支配をはねのけムスリム独自の社会を持ったコタバトとアメリカ統治期以降に入植が進んだダバオなど、国家支配にとって辺境とも言える地域を事例として取り上げた。2人の議論の相違を地域的な多様性と考え、国家の役割に注目しながらも異なる議論が生まれたと理解することは十分可能である。しかし、サイデルとアビナレスの議論は、そうした相違以上に国家論の系譜の違いと符号する相違点も示している。

真淵(1987)は、アメリカ政治学における国家論の系譜を3つに整理している。最初の2つはシーダ・スコチポル(Theda Skocpol)の整理する系譜であり、そのひとつは、アクターとして国家を捉え、国家の自律性や国家の能力に焦点を当て、社会からの要求圧力に抗して政策を立案・実施する点に関心を寄せるものである。もうひとつは、国家官僚者(state officials)の目的指向の活動ではなく、国家の組織機構が、政治文化に影響を及ぼし、ある種の集団の形成や、集団的政治行動を促進し、特定の政治イシューの浮上を可能にするという点で、国家が重要であると考えられるものである。これは政治のパターンを決める存在としての国家に注目する立場と言ってよい[Skocpol 1985, 21]。さらに、このスコチポルの整理に加え、3つめの系譜は、国家の能力を制度との関連の中で捉えようとする立場であり、国家と社会の相互浸透・相互依存を作りあげている「共同的政治装置の総体的システム」である政策ネットワーク(policy network)をめぐる議論である。そこでは国家の構造、社会の構造それぞれへの関心ではなく、国家と社会の接平面に関する構造に関心が注がれる[Katzenstein 1985]。この3つの国家論の系譜を念頭に置いた場合、サイデルは、「開発」と「略奪」という2つの国家のタイプを想定することでフィリピン国家の持つ矛盾をクリアしながら、第2の政治パターン規定要因としての国家の議論に沿ったものと理解される。一方のアビナレスは、選挙に代表される制度を媒介として形成される政策ネットワークの議論、つまり第3の系譜に位置づけることができよう。国家論の流れに沿って

異なるアプローチをとることが、先述の国家と社会についての理解の相違を生み出しているのである。

サイデルの立場は、社会の力を大きく否定する点でこれまでのフィリピン政治研究にとっては、「革命的」な転換を要求するものである。そしてさらに、その枠組みの立て方から、国家の制度的構造と「本源的蓄積」という条件の変更のない限り、変化は起こりにくいという立場をとる[Sidel 1999, 153-154]。一方のアビナレスは、これまでのフィリピン政治研究との継続性を保ちつつ国家の役割を取り込んでいる。その意味で、サイデルと比べれば「マイルド」な転換を提示するものである。また、国家と社会の相互依存とバランスを軸としているため、そのバランスの変化によって政治の変化を説明しようとする柔軟性がある。斬新さがサイデルの持ち味であり、柔軟さがアビナレスの特徴である。

### 3. ポシズムと相互応化の課題

両者に課題があるとするれば、以下の点が挙げられよう。サイデルに対しては、まず、暴力や違法活動が過度に強調されている点が批判的となる。それは、ひとつには、例えば自ら呈示する事例のひとつであり、暴力や違法活動への関与が見られないセブのオスメーニャー族のケースを、ポシズムの枠組みに果たして位置づけられるのかという事実関係における問題を引き起こす<sup>(註12)</sup>。これはさらに、サイデルの議論が「近代的」なアメリカに対する「前近代的」なフィリピンという二分法的理解に基づくものであるという批判、つまり、アメリカ人研究者の持つ「オリエンタリズム」的傾向を示すものだという批判をも引き起こすと考えられる[Ileto 1999]。こうした問題が引き起こされているとすれば、それはサイデルが、マッコイが想定するようなウォーロード的地方権力理解に執着することに由来していると言えよう<sup>(註13)</sup>。ただ、こうした批判は、基本的に国家中心的な制度論的理解とは別の側面に向けられたものと考えられる。その意味で、サイデルの採用する枠組みの本質的な有用性、つまり制度的理解の意義そのものはそれほど損なわれることはないであろう。サイデルがこうした批判を乗り越えていくためには、「ウォーロード」的地方権力理解から離れて

いくことが必要なのであり、それは先行研究の母斑を消滅させることと言っても良い。

一方、アビナレスに対しては、サイデルの提起する「国家の強さと社会の弱さ」という理解をどう受け止めるかという課題が残されている。アビナレスは国家と社会の関係に関心を注いでいるため、国家と社会それぞれを直接取り上げることをしていないが、前提として、明らかに、国家と少なくとも対等な存在として社会を想定している。それは、国家と社会の相互依存関係は非対称な関係では成立しないからである。

その意味で、この2つの研究をめぐる最大の論点は、おそらく、先に述べた2つの枠組みの相違、つまり、国家の外にある程度独自の基盤を持つ社会の強者を想定するか、しないかということになるだろう。そうした論点に関して、ハッチクロフトの提起はさらなる議論のために重要なものとなっている。社会を国家に収奪される対象と見るサイデルの採用するエバンズ流「略奪国家」の概念に関連して、ハッチクロフトは、「フィリピンは略奪国家の圧倒的な力によって悩まされているのではなく、むしろ略奪的な寡頭支配の圧倒的な力によって悩まされているのである。(中略) 実際、最も重要な関心は、どのようにしてごくわずかの市民がそれほど体系的に私利私欲のため国家を収奪することができたのかということである」[Hutchcroft 1998, 57-58]と指摘している。その上で、ハッチクロフトは略奪国家をさらに、「家産行政的國家」(patrimonial administrative state)と「家産寡頭支配國家」(patrimonial oligarchic state)に区別することを主張し、フィリピンを後者に位置づけている[Hutchcroft 1998, 58]。ハッチクロフトの議論は、そしてアビナレスも同様であるが、国家に働きかける社会の存在を認めるのである。

こうした社会強者を想定する理解に対しては、おそらく、サイデルの立場からすれば、逆に社会の強者の存立基盤は何であるのかという問いかけがあらためてなされるであろう<sup>(注14)</sup>。また、ハッチクロフト、アビナレスの立場からは、それに対する実証的な反証が提起されるだろう。いずれにしても、国

家と社会の関係をめぐる議論は中心的な主題であり、今後とも社会の勢力を認めるか認めないか、あるいは社会そのものをどう捉えるかは重要な論点となるのは確かである。しかし、少なくとも、社会勢力を考える上で、もはやそれのみを切り離して考察することが意義を低下させていることは明らかであろう。国家や制度との関係の中で取り上げられることによって社会はその特徴が明らかにされると思われる。

#### むすびにかえて

文化と社会構造から、国家と制度へとフィリピン地方政治研究のアプローチに大きな転換を引き起こそうとする2人の若手研究者の研究は、地方政治研究のみならず、今後のフィリピン政治研究全体の流れに影響を及ぼすことは間違いないだろう。

もちろん、こうした研究動向を、アメリカ政治学における国家論の復興がタイムラグをともなつてようやくフィリピン政治研究に「伝播」したのだ、ということは簡単で、その意味で、政治学一般から見ればそれほど新しい議論が提起されたわけではないの見解も示されよう。しかし、国家主導で開発に成功したという意味での「強い」国家に対してのみ国家論が適用されてきた中で、それとは正反対のイメージを持つゆえにあまり関心が払われてこなかったフィリピン国家に対し、「弱い」と言われる国家も、実は定義次第で(サイデル)、あるいは制度に着目することで(アビナレス)、「強い」側面が浮かびあがってくるのであり、フィリピン政治を見るうえで国家が重要な要素であることを詳細な実証研究に基づいて示した意義は非常に大きい。

国家とそれを軸とした構造に着目するアプローチはフィリピン政治研究においては始められたばかりで、その意味では、サイデルの研究もアビナレスの研究もいわばパイオニアである。今後理論的枠組みをより精緻化させるとともに、地方政治以外の分野、特に制度論の本場とも言える政治経済学の分野などでも、実証的な研究が積み重ねられていくことが期待される。

今後の作業のひとつは制度をめぐる議論のさらなる展開であろう。サイデルは選挙職に大きな裁量を与えられるアメリカ型の政治制度、アピナレスは選挙制度や任命制度の存在が地方権力の行動を規定する要因として重要であるとするが、さらに制度のより細かな点まで踏み込んで、制度と政治パターンの関係の検証が必要とされる。地方政治の分野に限って言えば、まだ雑なまま取り扱われている国家・社会関係と中央・地方関係との間の概念的な位置関係を整理することが必要であるし、その上で中央と地方の関係をより丁寧に検討していく必要がある(註15)。また、構造的なアプローチが常に直面する問題、つまり「変化」をどう説明するかに関する議論も積み上げる必要がある。特にサイデルの枠組みは継続を強調する面が強いためその課題を引き受けなければならない。ひとつには、地方政治を含めた意味で、マルコス権威主義体制の成立と崩壊を、国家中心的な制度的アプローチのなかでどう位置づけられるのか、ということが問われるだろう。加えて、サイデルやアピナレスの事例だけではカバーしきれない現実のより複雑な多様性にどこまで対処していくことができるかという問題もある。今後いかに実り多い研究が出現するか注目される。

(注1) この研究の背景には、1960年代の比較政治学における政治文化論の隆盛がある。

(注2) 標準的なパトロン・クライアント関係の定義は次のようなものだろう。

「パトロン・クライアント関係——役割間の交換関係——は、社会経済的に地位の高い個人(パトロン)が、低い地位にある個人(クライアント)に対して、その影響力と資源を用いて、保護もしくは利益、あるいはその双方を与え、クライアントの側は、パトロンに対して個人的なサービスを含む一般的支持と援助で報いるという、道具的な友情関係と関連する、特別な2者間のつながりと定義される。(中略)3つの追加的な顕著な特徴(があり)(中略)最初に、2者のパートナー間にはその相対的な資産、権力、地位を反映した交換の不均衡がある。(中略)パトロン・クライアント関係の2つ目の顕著な特徴は、フェイス・トゥー・フェイスの個人的な性質を持つ関係である。(中略)3つ目のパトロン・クライアント関係の顕著な性質は、関連する親愛の情を反映する

もので、そうした関係が、明白な個人的契約関係ではなく、広範にわたる『全人格的』な関係であることである」[Scott 1972, 92-95]。

(注3) 派閥の定義を引用すると以下ようになる。

「典型的なフィリピンの地方派閥とは、比較的大きく裕福な家族集団が中核に位置し、その周辺により小さくそれほど裕福ではない家族集団が位置するという配置構成を有するいくつもの家族集団のゆるやかな結合である。それぞれの家族集団内では、親族関係の強力な網が家族を凝集性の高い集団に結合させている。派閥内の連携した集団同士の間では、比較的重要度の低い2者関係——血縁よりも、一般的には、婚姻の絆、儀礼親族制度、パトロン・クライアント関係など——が、より弱い絆を作りだしている。いくつかの家族集団は、地方選挙や地域社会の名望競争において成功することを狙って、競争に必要な能力を得るために十分な大きさの連合を作る必要にかられ、ある程度の期間、お互いに連携して行動する」[Landé 1965, 17]。

(注4) とはいえ、1986年の民主化を地方政治の観点から捉えなおしたベネディクト・カークフリート(Benedict J. Kerkvliet)とレシル・モハレス(Resil B. Mojares)の編著は、変化についても注意を払っており、アイディア、能力、政策中心の政治などの萌芽について言及している[Kerkvliet and Mojares 1991, 4-5]。

(注5) マッコイの編著について詳細な検討を加えたものとして長坂(1996)を参照。

(注6) その他にも国家と制度の利用による政治権力の確立を提示したものとしてAnderson(1988)がある。また、Wolters(1989)も国家の役割を強調している点で注目に値する。地主階級の地位の確定がアメリカ統治期の土地所有権確定によるものとした梅原(1992, 107)は国家の役割を具体的に示すものとして興味深い。

(注7) 比較政治学における合理性、文化、構造という3つの流れを整理したものとして、Lichbach and Zukerman(1997)参照。なお、最も広く制度を定義する立場は、文化も制度のひとつとするが、そうした場合、制度をあえて分析のための変数として捉えることの意義が失われてしまう。文化を制度から除外するのが一般的であろう。

(注8) サイデルの1989年の論文[Sidel 1989]は、「ウォーロード」的理解を示した初期の作品であり、また、メディアもこれを意識している[McBeth 1989, 36]。さらに、サイデルは、マッコイらの研究にも参加している[Sidel 1994]。

(注9) エバンズはこの雑誌論文のあと、そのアイデアを発展させEvans(1995)を著わしている。



- Industrial Transformation*. Princeton, New Jersey : Princeton University Press.
- Grossholtz, Jean 1964. *Politics in the Philippines*. Boston and Tronto : Little Brown and Company.
- Gutierrez, Eric 1994. *The Ties That Bind : A Guide to Family, Business and Other Interests in the Ninth House of Representatives*. Pasig : Philippine Center for Investigative Journalism and Institute for Popular Democracy.
- Gutierrez, Eric U. et al. 1992. *All in the Family : A Study of Elites and Power Relations in the Philippines*. Quezon City : Institute for Popular Democracy.
- Hawes, Gary 1987. *The Philippine State and the Marcos Regime: The Politics of Export*. Ithaca : Cornell University Press.
- Hollnsteiner, Mary R. 1963. *The Dynamics of Power in a Philippine Municipality*. Quezon City : Community Development Research Council, University of the Philippines.
- 1973. "Reciprocity in the Lowland Philippines." In *Four Readings on Philippine Values : Fourth Edition*. IPC Papers No.2. eds. Frank Lynch and Alfonso de Guzman II. Quezon City : Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University.
- Hutchcroft, Paul D. 1991. "Oligarchs and Cronies in the Philippine State : The Politics of Patrimonial Plunder." *World Politics* (43) : 414-450.
- 1998. *Booty Capitalism : The Politics of Banking in the Philippines*. Ithaca and London : Cornell University Press.
- 2000. "Colonial Masters, National Politicos, and Provincial Lords : Central Authority and Local Autonomy in the American Philippines, 1900-1913." *Journal of Asian Studies* 59(2) : 277-306.
- Ileto, Reynaldo C. 1999. *Knowing America's Colony : A Hundred Years from the Philippine War*. Hawaii : Center for Philippine Studies, School of Hawaiian, Asian and Pacific Studies, University of Hawaii.
- Katzenstein, Peter 1985. "Small Nations in an Open International Economy : The Converging Balance of State and Society in Switzerland and Austria." In *Bringing the State Back In*. eds. Peter Evans, Dietrich Rueschemeyer and Theda Skocpol. Cambridge : Cambridge University Press.
- Kerkvliet, Benedict J. and Resil B. Mojares 1991. "Themes in the Transition from Marcos to Aquino : An Introduction." In *From Marcos to Aquino : Local Perspectives on Political Transition in the Philippines*. eds. Benedict J. Kerkvliet and Resil B. Mojares. Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Lacaba, Jose F. ed. 1995. *Boss : 5 Case Studies of Local Politics in the Philippines*. Pasig : Philippine Center for Investigative Journalism and Institute for Popular Democracy.
- Landé, Carl H. 1965. *Leaders, Factions, and Parties : The Structure of Philippine Politics*. New Haven : Yale University.
- Leichter, Howard M. 1975. *Political Regime and Public Policy in the Philippines : A Comparison of Bacolod and Iloilo Cities*. Special Report No. 11. DeKalb : Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University.
- Lichbach, Mark Irving and Alan S. Zukerman eds. 1997. *Comparative Politics : Rationality, Culture, and Structure*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Lynch, Frank S. J. 1959. *Social Class in a Bikol Town*. Research Series No.1. Chicago : Philippine Studies Program, Department of Anthropology, University of Chicago.
- Machado, K. G. 1974. "From Traditional Faction to Machine : Changing Patterns of Political Leadership and Organization in the Rural Philippines." *Journal of Asian Studies* 33(4) : 523-547.
- Magno, Francisco A. 1993. "Politics, Elites and Transformation in Malabon." *Philippine Studies* (41) (Second Quarter) : 204-216.
- McBeth, John 1989. "Manila's Disarray Leaves Countryside under Local Barons : The Boss System." *Far Eastern Economic Review*. 14 September : 36-43.
- McCoy, Alfred W. 1994. "'An Anarchy of Families' : The Historiography of State and Family in the Philippines." In *An Anarchy of Fam-*

- ilies : State and Family in the Philippines.* ed. Alfred W. McCoy. Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Migdal, Joel S. 1988. *Strong Societies and Weak States : State - Society Relations and State Capabilities in the Third World.* Princeton : Princeton University Press.
- Mojares, Resil B. 1994. "The Dream Goes On and On : Three Generations of the Osmeñas, 1906-1990." In *An Anarchy of Families : State and Family in the Philippines.* ed. Alfred W. McCoy. Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Nowak, Tomas and Kay Snyder 1970. "Urbanization and Clientelist Systems in the Philippines." *Philippine Journal of Public Administration* 14(3) : 259-275.
- Rivera, Temario Campos 1991. "Class, the State and Foreign Capital : The Politics of Philippine Industrialization 1950-1986." Ph. D. Dissertation. University of Wisconsin-Madison.
- Scott, James C. 1969. "Corruption, Machine Politics, and Political Change." *American Political Science Review* 63(4) : 1142-1158.
- 1972. "Patron-Client Politics and Political Change in Southeast Asia." *American Political Science Review* 66(1) : 91-113.
- Sidel, John T. 1989. "Beyond Patron-Client Relations : Warlordism and Local Politics in the Philippines." *Kasarinlan* 4(3) : 19-30.
- 1994. "Walking in the Shadow of the Big Man : Justiniano Montano and Failed Dynasty Building in Cavite, 1935-1972." In *An Anarchy of Families : State and Family in the Philippines.* ed. Alfred W. McCoy. Quezon City : Ateneo de Manila University Press.
- Simbulan, Dante C. 1965. "A Study of the Socio-Economic Elite in Philippine Politics and Government, 1946-1963." Ph. D. Dissertation. Australian National University.
- Skocpol, Theda 1985. "Bringing the State Back In : Strategies of Analysis in Current Research." In *Bringing the State Back In.* eds. Peter Evans, Dietrich Rueschemeyer and Theda Skocpol. Cambridge : Cambridge University Press.
- Wolters, O. W. 1999. *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives : Revised Edition.* Ithaca : Southeast Asia Program, Cornell University.
- Wolters, W. G. 1989. "Rise and Fall of Provincial Elites in the Philippines : Nueva Ecija from the 1880s to the Present Day." *Sojourn : Social Issues in Southeast Asia* 4(1) (February) : 54-74.

(アジア経済研究所地域研究第1部)